えし 橋ぬへさ板田のえしれ橋はくりかへすしにもわたりつるかな

契沖吐懐編云續後拾遺云 あはずての板田の橋のこほれなはけたよりゆかん恋そ我せこ

此歌萬葉第十一にあり先の歌は是をもと歌とせりをかでとゝへるはりと謂り之萬葉にハ小墾田とよめり然日本紀にハ又をはりだと訓ぜりこれは大和國高市郡小墾田の宮とて推古天皇の遷ましゝ宮是に付て板田の橋絵考ふれハ大和高市郡なるらしまでしきてうり又板田ハ坂田の謬りなるべしと云 云されバ板田の橋勢多の名とせらるハ萬葉の云萬葉書より初又文字のをかくしとゞかたつさて謬り来りるなるべし必大和の名所なり

○小俣神社 今八王寺といひて町の内左りの方 祭神倉稲魂命 外宮の末社之○無量寺 安東寺宗

流之 菓築なる阿弥陀 已田ちる弐の他よのへりむる弐ハ村松の庵あるく大淀のひがし村なり 毎年七月十六日會式あり

○離宮院 小俣の町より左手にあり 拂一方 康丸一勝と並り 祭神豊受太神宮 ふるハ湯田郷より 已本の裏へ出すりと云 雄略天皇の二十二年七月七日豊受宮を丹後國与謝真名井原より迎奉る時度會郡沼木御平尾に行宮を建て三ヶ月坐し給ふこれを離宮と申奉る其後高河原宮に移して後延暦十六年八月三日此湯田御宇有村に移をとあり 是ハ斎内親王の離宮へ移しまりし之其斎内親王離宮院ハ孝徳天皇の御宇に始て立らる延暦に年九月十九日斎王の離宮院にかて豊明給ふと云是之其後仁明天皇嘉和六年十一月六日斎宮を上に付湯田の々離宮院を斎宮とし然ばりくハ外宮の離宮ありしをとる川不入引しより斎に斎宮を上して斎宮の所不と一不ふ移し なり又屯倉も一不にありて大度なりし所其後ハ斎王も勅使も此院にて宿らせ給ふ 神宮雜

例抄并宮雑事記に次第衰へ怠るより退転○其後廃せしを大宮司精長朝臣再興せり

中臣氏社 離宮院の内にあり 是ハもと津嶋が崎といふ所にありしを離宮を湯田郷に移さるゝ時水難によりて共に移さるゝと雑例抄にみえたり則春日明神にして祭主宮司の祖神なれバこれを祭る○此所に昔十員の禰宜あり本宮に移さるゝ時皆供奉せり其内一家上田久太夫といふ人此に残まり

久太夫が家名今鳴子屋といふ外宮禰宜の上に鳴子の社ありつんがなりとて捉ふてさゝく社のうしれ久太夫の名あり

◆木曽瀬 宮川の下海辺なり 此所まで海苔の名物こそがせのりといふ

○宮川の流ハうつりかはりてなかれてより名所の紙宿ハ行くところ
いふるふちを水のかゝるぞといへバある人磯のさんといふなのさるのかゝるなり
家あることそがせとなんやといふ名残とて

名寄
さくらはいこそかせまで摘のかゞみを流して行人に問ぞや　長明

伊勢参宮名所圖會巻之三終

とゝふ又毎年内宮にて六月十七日九月十七日外宮にて六月十六日九月十六日よハ秘密のことゞひく蘘荷一づゝ宝殿へあつる也俗にゐる拍子ふるをへよろう泥是を献ずる者坂秘密の祢宜といふ又源わ續して今まゝある此時有爾村より一壹づゝ十文ずつ鶏冠をしてき神前にさゝげてヒヨ/\と唱へけるより俗にこれをヒヨ/\祭りといふ是姫宮女孺子名某の遺風也

▲湯田野　田丸の東之魔大の野なりみな武蔵野のごとし明野といふも此ホの内にて東西一里余南北三里ばかりの曠野といふも同じ野なり

▲竹川　竹川再出るれども○流出ハ比川といふ今小川にて出橋あり○源は池まへの西南より出て一説にまするのく出羽村の南を經て度會の牧野村の西より出湯田郷の南を東へ流る野より村の東北へ經て有瀧村の東より海へ入る

名寄
竹川やゆた野がはらをたづぬれば山田の原の松は墨まり　長明

▲湯田村　明野の東南にあり　湯田神社　不祭雷電神　式内之　村の内にあり

▲千引石　明野の東の辺　宝鏡院の境地なり　日本紀に千人所引磐石といへり　和名抄にも同しく千人して引ほどの大石の名なり
此を名所とする其ゆゑ知らず○是ハ小俣離宮院へ出る古石なり

家集
君がため湯田野をまけてひろひつる千引の石は誰かあふべき　俊頼

上野村　俗に明星といふ又安宮村のつゞき　ゆたの内にて今の郷名なり　○　中明星　新明星

安養寺　号長松寺　上野村にあり　本尊十一面観音洛陽東福寺廟元大恵佛通禅師の草創なりし昔大寺なりしを今ハ纔に中菴となりて本尊と開山の像とを安置せり　天正の乱より断絶せり

小俣

○是より南に田丸村あり 村中に田丸弾正大弼の霊祠。田丸城。虎蔵主康甚寺 此内に稲葉大蔵の古墳あり

○西ハ岩手蔵波祭主家宅跡。相可より相可上社。冨向。山田。宮寺。名所矢野神山。本多社。伊蘓神社 此村にあり和名抄 伊蘓々と 伊蘓寺。神山一乗寺。飯高。高宮。此余名區多かれども此に略す

〇斎宮よりも又端本より道あり紃古道なり
宮川西岸
小俣社

▲大淀濱 俗に鳥居戸といふ ○大淀松 大淀の濱にあり昔倭姫命皇太神の御輿を留て方を見給ふ所として一本の松あり是を姫松といふ。但し是俗説なり

拾遺 大淀の御禊幾世になりぬらん神さひにける浦の姫まつ　兼隆

此松延宝年中大風に倒れ了ぬ其時の御代官其跡に今の松を植て自ら一首の哥をそへらる

幾世経て枯し松と大淀の根こそて帰る波に向ふや

若みどり継くそかゝる大淀の松れ千とせは八千代へよとて

此古松をきりて文臺を作り長官某に奉るとなん

▲大与杼神社 祭神豊玉彦神云云 式内之 ○駒除池 同所にあり○昔王御禊の時駒除の旧跡なり

▲村松岸 大淀の東の村にありて御逍遙の地なり

夫木 せくれ貝のなかると寄ば村松の岸うつ波のひゞきえなり　外宮 誠家

是より外宮大佛の右の方に宇田湯田村を経て小俣へ出る古への巡道

▲宇田 天海田水太刀自神社 祭神豊玉姫命 外宮の南郷の表の内にあり伊勢式社の内也其辺の田の字を宇田といひて有尓村の轄にあり今はなし

曙の宇田の畔より立聴のなるくきくや万代のりだ　俊頼

▲有尓 田丸より一里小之 ○有尓神社 和祭天穂日命土師氏の祖神之と有尓村にあり古例にて両宮遷宮の時三千三百三十の土器を作りて貢ぐ是を有尓土器といふ並べて此邊を有尓の郷

小俣離宮院舊趾

名所 大佛

をんて身の老囚をころすしつひ伴ふ青ハ法皇より赦免せしともいふ今ふてハ此絵を忌かく若倍人といふ里人もあり又是法皇の遺跡なりとかくの里何里の石とも志れがたし湯苑按ふるに近漾有介御の同笠木の神社あり義村あり〳〵や此遊をかくの里といふ明神湯田社より一面に廣野之し在其里ノく又へかんゝざれバいふ乳此外今昔物語、腰滝等あり〳〵も

大佛 御名の右の方ゝあり 蓮光寺といふ 是ハ度會郡下中村善提山天平神護二年より大佛と遷らる 弘長二年の焼亡に小俣ゝ大佛山人拐のくに移す此所に又安置せらる
在に小俣に大佛山の名あり。此寺の横より東へ入て湯田社を經しハ古へ之

名所 笛川

笛川 斎宮村ゝ西 こそ川なり 此邊りに佐ゝまゐの杜ありし在の名こ業平お﨑の笛を吹しみよりく名づけしとふいふなるあし、

建長八年百首哥合
喜れさちて服やせまし笛川の瀬によるゝ竹のちのかうれふ　九条内大臣

名所 花園

花園 ハ日ふ古名よあり○此邊北町斗の西花菖蒲池に出て生ずる花の時ハ都へ移くとして紫の手出弁よ移ぶがおらし佗ふあり此あたりなるす又きしこれをどんどをるよらふ又つまへいかくう川そこともいへり○家を斎宮の花園とはいへども又しらみハぜけるこしあられとも花園の地名去々ごさよ伝うざれバ姑くの俗にまかすがふ

催馬楽
竹川の橋の詰なる花その々我をはゆるせせめさしさてへく

夫木
思ひやるいつさ此宮ハ絶ふりて花咲のころかさ竹ださ郎　為家

名所 御溝池

御溝池 ハ日ふによあり斎宮御溝の絶之といふ ○ 斎宮家集 たゆちうんをとうしなるくまハ斎宮のくえ五月五日おりうそらえへ参んふに まいりて宮の御花のおりみをとうへの池とならんいふ
おゝらし世のこらハ此池の伝やめ草ゐうぶ絶例よ人もひうきん　斎宮女御
是れより海道の左りへ入く古名の古跡

▲北畠屋敷跡 今も上多気村といふ地之宮川より西一里に築山泉水桜馬場大道ある也名旧跡ありしが今は料地となりてより此村廣く次第あり里人怖れて八幡宮を勧請しぬ焼出の松は三百年にて他より移し植ても衰へずして三百年になる

▲勝田 ○ 和屋 此両村は大神宮の楽人三座の内和屋本家勝田本家の住地也神社に於ひて正月三日より六日まで例として猿楽の三番叟をまふ

▲翁塚 勝田が家の宝物として神事に用ゆる所の翁の面の跡なりし地也といふ

勝田、和屋、青王、是を伊勢三座といふ幷伊勢古代の楽にて三番叟のごとくざれうたを舞楽なりこれを古語にさるがうといへり さるごう 即猿楽之今の能は東山殿已来のものにしていふへよはありけん

▲藤原 南中小と三村にわかれ松坂よりひがし二里 ○ 御衣黒山 小名 母宮御衣黒を焼跡し也 云

懐中抄
紛されの御衣黒の山焼れむにも煙をや神にたむけつ紛

▲浜村 真名胡神社 内宮末社の内也 祭神未詳 一説に此辺をたゞちの浜ともいふ紀伊国に同名あり

秋宮歌合
月かけのたゞち浜のたつ貝は波もひとつにみつ入ぬらん

▲根倉 佐々ま江の神社 式内にて祭所大歳神 云 遷幸要覧には佐々牟江とあり 西大淀村と紛郡村のうち大淀の内にはありと是を佐々ま江といふ七八間計の板橋篠笹の橋といふ

▲根倉神社 所祭宇賀御魂神 国御祖神社 所祭土御祖神 根倉村に在

儀式帳には大土御祖神社根倉鎮皇御神とあ

月夜にはねぐらの森もくまなくてたゞち浜いかならん

命同年の春二月皇大神へ奉りし是伊勢斎宮鎮坐の始なり同三月宇治の斎宮より多気郡多気の郷へ宮を移されて方域四町に宮舎を造営し竹の宮と称し代々の斎内親王爰に住を其星霜凡百卅四年を経て淳和天皇天長元年甲辰秋九月竹の宮より皇大神への行程遠しとて度会郡湯田郷宇羽西今の小俣なりの離宮院へ遷されて後十六年を経て仁明天皇承和六年に宮舎一百余宇一時に焼亡とよりて再び多気郡竹の宮にうつしまゐる其後又凡百八十余年を経て後宇多天皇の御女奨子内親王まで七十五人までハ斎王定り給へど其のち後醍醐天皇の皇女祥子内親王斎宮に立給ひしかども元亨の兵乱起りて参行ハおはしまさずして爰の斎宮と称し東都に長慶門院をぞや給ひける是より伊勢斎宮の行断絶とハなりけれ

○定斎宮事　延喜式曰凡天皇位に即給へバ先斎王を定むる内親王の未嫁せざる者を卜ひ其家の四面内外の門に木綿賢木を立其後日を撰で大宮の内にとがし其後又禁中の便所を卜ひきハめて初の斎院として明年の七月をとそれに入給ふ又宮外の浄き所を卜ひ八月上旬吉日を卜して加茂川に臨で禊して常の御殿に入給ふ新に清浄の地を点して木の鳥居小柴垣なとしつらへる野々宮に入給ふ是抱てこの潔斎をとり給ふと云なりて野々宮にうつさせて明年八月を抱てに籠りて九月上旬に又かの川に臨で禊して伊勢斎宮に入らせ給ふ也

斎宮忌詞　佛を中子といふ。経を染紙。塔を阿良良岐。寺を瓦葺。

欬長、尼を女欬長、斎を片膳、これを内の七言といふ〇死をなをる、病をやすみ
哭を塩垂、血を阿世、打を撫、宍をくさびら、墓を壌、これを外の七言といふ又堂を
香燃、優婆塞を角筈といふ

〇斎宮群行の巡路ハ奈良の京よりの例にまうでし其巡ハ小倭 河口関 波多
宮古 月本 一志 曽原なり 飯高駅 漸石 多氏利 清水 坂本 斎宮 小俣 山田 宇治を経るなり

〇斎宮帰京の次第ハ出御ありて多気川の御禊ありて一志の頓宮に着二日ま
川口の頓宮に着給ふ三日ハ伊賀の堺屋にいたり堺の祭あり御浴殿なる御服ハ辛
櫃に入て公に奉御衣ハ忌部に給ひ出されく御衣を新に着給ひ新輿に召さる
阿保の頓宮に着給ふ四日名張横川に禊ありて大和都介の頓宮に着給ふ
又日和介川に禊ありて大安寺辺 第く 奈良坂をこえて山城相楽頓宮に着給ふ 木津川の禊あり
河内茨田真手の御宿所に着給ふ七日ハ難波三津浜安曇江三所の禊ありて大江岸の
御厨頓所にゆいて世府三津寺 天王寺 諷誦あり八日又先日の御宿所に着給ふ九日
河陽宮 今の山崎なり に至り十日京に入給ふ〇禊の具ハ五色の絹 各二疋 安藝木綿 畳二 木綿 両
綿 大一 麻 大二 鍬 二口 鐵人像 二十枚 布 酒 鰒 堅魚 海藻 臘 塩 水戸 杯 缶 柏 瓢 葉薦
食薦 琴 筆 龍 鱶胎 等也 とぶる又十种川の下に鉄の人像壷に入てうかべ放りてなげ入るるの具なるべし

斎宮繪馬 斎宮の東に小倉あり〇十二月三十日夜絵馬をかくる例なり謡曲の絵馬といふも此
後絵より分る馬とまうし其の例によりなまりてやおなんと又世に絵馬といふ名ハ是を始めとかう
或云正月元日の鶏明にくろとしろの二の繪にせよくろきのうくをすかさ袋を画く其ハ稲の豆種

明星（みやうぜう）

明星（みやうじやう）の茶屋は
きらつごり
よひもあり
又首（くび）をちゞめ
あつさも
なし

読人志らず

大淀濱（おほよどのはま）

伊勢物語
大よどの濱（はま）におふてふ見るからに
心はなぎぬかたらねども

大淀松（おほよどのまつ）

西大淀村出口海濱にあり

仝
おほよどの松（まつ）はつらくも
あらなくに
うらみてのみぞ
かへる波（なみ）の郷

翁塚

建保歌合　範宗

大よどの浦に群居る友鶴の
あそぶ日かげの空ぞのどけき

此詠心よむしろ秋の比
此地に行かふ稲穂
苅たる人の傍に群て
落穂ひらふ鶴どもを
驚せどもさらに恐れず
人に馴たると聞しと画人の
ありしまゝを寫しぬ

▲大國玉神社 在御祖神社 六根村にあり此末社 摂社を制を 保津 六根の ○天香山神社 祭神千々姫命之 正月七日には御饌として新菜羹を六根保津七見島田宮村より外宮へ進献ど

多氣川 一名稲木川又禊川 今の継橋より北に古道あり昔より勅使こゝに還へなり禊を修せらるの式ありたる禊戸の森とも云ふもあり今は宮川にて甚式ける斎宮解縄の神事も祓殿の禊ありし之 源は大和伊勢の境なる見越より流るゝ凡二十里下流八里ばかりにて大淀の浦東郡村の海邊にあり○事実画上に記を

[illegible]集
神代よりさもかはらぬ竹川の代々を君にぞかぞへわたらん

古歌
竹川の橋のはなる花園に我をはゆるせ見さしとへなむ 讀人不知

此歌催馬楽にも出たり昔斎宮ましませし時も橋ありて甚橋の花園のありしとて今も花ぞのといふ地名あり

再拝橋 幸むしともいふ 禊川の渡場の東北にあり勅使参向の時多氣川にかけし橋なり

いのりつるさいはひの橋柱幾代名もうれしやまずや 太宰大弐高遠

今此橋杭の跡まで絶ゆ瀧瀬又小児の疫瘡の呪まじなひに用ゆればこれ跡ありともいへり○継橋の川の西方を稲木村といふ村中に八王子といふ社ありこれ不詳神名帳の竹の神社なり

斎宮村 旧名竹の墓村 金剛坂のつづき 昔斎宮ありし所に号く 古斎王の寝殿を制を 斎宮とも

斎宮舊蹟 即斎宮村の里人是と今斎宮の森又斎王の宮とて二ヶ所に分々 時々宮といへり

ども斎宮斎王は別所にありし（斎宮は斎王の座す宮のあとなり　斎王は内親王の斎王に立せ給ふを云）なれば是を按ずるに延喜
式斎宮寮に大社十七座斎宮の内にまします其は十七座の内地主の神一
座なりとぞや詳しからず○一方の森の小社は両長官より制札を立て傍に
小さき画馬舎あり是旧跡にて築地の正中なるべし又是を斎宮の野宮又は竹の宮跡
いひ一郡を多気の都と云（親王と竹の宮竹の宮其跡とも　又は竹の宮竹の都とは云なるべし）古池あり（これは末の業平の池とも云ふ）
大かたに斎宮と機殿しおかしびく神統ぶにありし時は機の宮と称せり

名寄　常盤なる竹の都のなかれがらまほしきことをかぞへてそ見る　俊親

夫木　竹の宮まうでよう人ても代までは絶ぬ神のみこの名そこれ　俊成

○斎宮とは昔天子御即位毎にト定の式ありてそのさだまりたまひし皇女を
皇太神の御杖の代として宮に移し居らしめ給ふ宮殿あれば宮舎の数
多く厳重に侍りけり是れが皇女都を出させ給ふ時公卿女官達楽を奏し
て瀬田の橋まで送り奉る其の行粧美々しく道を下り給ふ斎宮群行とは申せし也
事実は江次第に委し○又皇女内親王を出させ給ふ時天子自ら挿ゑ給ひ内親
王の額にささせ給ひ都の方へ趣き給ふなと勅あり是を別れの櫛と云

○斎宮濫觴　垂仁天皇二十六年の比倭姫命に神ろき其は度会郡宇
治の郷五十鈴川上の大宮の際に系り天皇二十年庚寅倭姫命年既に
老耄て依り仕まつることかなはずとて景行天皇第五の御女五百野皇女久須姫

斎宮村（さいくうむら）

例幣使休（れいへいしきうそく）
和泉屋（いづミや）

斎宮旧跡（さいくうきうせき）

俗に斎宮の森と云ふ森林奥に小祠あり

坂士佛
参詣記云 斎宮（さいくう）に
参（まゐ）りぬれバいにしへの築（つい）
地（ぢ）の跡（あと）とおぼしくて草
木の高（たか）き所々あり
鳥居ハ朽（くち）のこりたる
ち屋もよこたふれるを
人（ひと）だにもかくとまらず

斎宮黒木鳥居

世をはなでふし木

とのくそろへそのさね

まし云云

○今五本木の名ある海老

丸植うりま用ゆ天神

の社あれども先年名所

にいかしがしぞ新宮の跡の

志れしを惜まれしと

の野々宮ともいふハ

謬りなり

新宮の森

稲置川 舊名竹川 又猿川とも云
昔勅使を饗むかへまつりて猿を饒とする式ありこれを迎境の猿とし下樋小川の猿ハ堺とせしとぞ今ハ宮川にて其式ありとぞ

○三所稲荷の社 又 森あり是を猿戸の森といふ これ古名なり

神服機殿(かんはとりはたとの)

大垣(おほがき)村にあり
松坂(まつさか)より東二里
俗(ぞく)に下機といふ
又古名服部(はとり)の
里(さと)といふ

石神
寅社
八まん
本社
春日
稚産霊
機殿

神麻續機殿
井口村にあり俗に
上鈹といふ古名
御糸の里
○此糸漆の和紙
紺鈹といへり
本社
春日
機殿
寅社
奏社
御鈹屋

▲意悲神社 松坂より巽廿町下村にあり 神戸御厨の内にて式内なり 垂仁天皇廿一年癸丑十二月廿八日飯野高の宮に移して同年奉齋宮其同跡也 飯高飯野時代よりてかしにや 今是を神鏡宮又神立の森神飯の宮と云 按るに意悲は蘭之成に神ありて荷の蘭田はおもり今にも大神宮祭りの毎に遠を献ずる例ありと然れど遠をとりも其遺風也 飯高飯野の郡名も蘭田蘭野の称にて松坂にも蘭生ずるども古に蘭田の訓義なるべし

▲下樋小川 右の宮の東に小川あり是を 下樋川と云今下村と云は下樋村之 昔齋内親王其外勅使等大神宮の境に入者皆此川に禊して是より穢の事止むと云 穢の事とは昔勅使の往来に云王よりも修祓後の穢と云者之

下樋小川橋

斎宮百首 長秀

音にきく下樋小川の橋打て引渡しけん御代のたえけると

五智如来堂 釈迦弥陀大日阿閦弥勒 櫛田川のそばにあり

櫛田 本名是朱村之 俗にくしだといへども櫛田村は川の東にありて是古名之 松坂より東里十八町

○大櫛神社 左へ入込 田中にあり 祭神大櫛姫命 内宮の末社なり

槻本社 是は延喜式に見ゆる櫛田槻本神社之祭不櫛玉神と云

櫛田社 祭神大若子命 今是朱村町の左に大櫛の社又町のうしろに御櫛社といふあり 此二社のうちいづれか延喜式に所載ならん 乞気郡おく

櫛田川 是朱村又云 町下にあり 川源は大和伊勢の境なる見出嶽より出て川下は一里計あしこを黒部村大淀の浦を経て海に至る竹川も同じ流也なり

此川を誠に左は上機下機殿あり これよりは十七町 松坂から東二里

神服部機殿 神名帳に飯野郡流田の御服の里と見へたれども多気郡大垣内村にありて是を下機といふ又服部の名とす 祭神 伊刀麻神 麻刀方神

神麻績機殿 同郡井手の今は飯野郡井口村にあり上機といふ 祭神 麻績屋姫命 今神祇合白 四月九月伊勢神宮の神衣祭これ神服部等参河赤引の神調の糸をもつて神衣を織又麻績連等麻を績て以て荒和の衣を織て神明に供ども神衣といふ○祭の日は神服部は右に麻績は左にあり○今九月十六日同十七日神嘗祭の勅使を献らるれは此神衣祭を兼給へり機は文字のごとく上機は麻を績て布を織下機は絹を織るなり○むかし大神宮飯野郡高の宮に遷幸し給ひし時は機殿を長田御に経営し其後服機殿を流田に造立せり又白河院承暦三年に安久の名に定め給ふ今の両機殿是也両殿の造営を御糸の里として同月九月十四日毎に荒妙和妙の神衣を織て内宮に献ずるなり後花園院の比までは其例厳重也今は同月九月十四日に土俗の女工を撰ぶるのみの故実ありて荒妙は布にて和妙は絹なり

魚見社 ミホツミといふは誤也 川端村にあり 所祭月読御玉命之 遷幸要略に倭姫命此川の後に至り給ふ時魚御膳に跳入たれによつて魚見と名付たまふ 神名帳に多気郡魚海神社二座と云是也 魚見といふは訛して坤の田の中に石の瀬ありこれ後の證なり 鯉が池ともいふ二間四方の石祠壊たる蘖松杖をうゑあまり長サ十六間横二間の社地を祀のうちに遊んで小魚又鯉の坤拝杖の上げりける勢の申すに建てり今も一座をうつして相殿にましますなり

櫛田川（くしだがは）

きゝが滝 くしだ川みや こぼれ出て 神の恵も うち解ぬらん

此川の昔秋宮櫛をなくし給ふ故実によりて櫛田川と いふ又昔の下樋小川が此所へ出て宮 川へ入給ひしとぞ

ぞら如来

櫛田社

櫛玉社

光明山遍照寺 十王堂のひがし矢川町にあり此寺に元文年松坂の人芭蕉塚を建る表に発句あり
ながらへてもゆさまに行のけしきかな 裏に銘あり天寿の書之又此矢川町へむかし
松坂町にてありしにや 炭俵集に 松坂や矢川へはいるうら通り 吹るゝ人もつゝむ中との秋
風俗文選南行記に許六矢川といへる面白き所あるよし今は只口神稲も名のこと云 云下略
少彦名命神社 右の辺りにあり 光も天神とも云 ○梅松山常桐寺 日野町にあり

▲光福山朝田寺 朝田村にあり 本尊地蔵菩薩 釈空海開基 此辺下樋小川といふ辺より
六首の街道迄 ○長田社 寺より二町西南にあり 延喜式内意悲田神社にして
祭神垣安神之 祭る正月十六日古の園田を興ふ 一名森塚又天王塚とも云 朝田寺は垣安神の神宮寺也古
忠紫が塚ともいふ 此は正月十二日神事にて幣をうけて印鑑をあまた
後世長田の村とする まなびとらふも誤りなり

▲川島 魚見の口のうちにあり

▲清水 松坂東一里半 此所の伏拝と云 田の字みな是れ流田社の伏拝なるべしとあり
当国長集に 二月二日清水といふ所を通りければ風のかまどのあれはてたる松
汲人もなくて荒して来てこれが池中の清水とくさみてけり
其後旱雲ふりける松のみなみなはちやと尋侍りければ伏拝とて天照太神宮遥向の松と云へ侍りける程に
天てらし神の御前とふしおがむ松の葉ぶりの代をいのりける
此松即中古の跡なりけれども古きもあればさもあるべし

▲清水森 新古今 結ぶ清水の末は尽せじと思ひも果ぬ時なる哉　大中臣定忠

▲七見 名高見神社 式内之紫神 轍御魂神 七見の内下の松といふ所にあり

愛宕山龍泉寺
愛宕權現

本堂

松坂大橋
まつざかおほはし
四五百森

西荘の橋といへる是之水上ハ
同郡下仁插村邨名来邨谿山
より出て石ば村川を東へ経て
猟師年尾村の東北川へ流れて
海に入る

機関的

伊勢路の一戯場にて往くみえ

昔大原に住る人かの雑喉寝に出て闇夜に妻を失ひしが夜明て其女をこれ鬼一口に喰付るとて数多に怖し其夜辛ふして都の方へのがれ出るとなんこの古人は此偶射と似たり中にありよりてはむかつぶてだるまがきてとそてたれ

忘井（わすれゐ）

天仁元年斎宮群行の時忘井といふ所にて

わかれ行（ゆく）みやこのかたの恋（こひ）しきにいさ結（むす）びてん忘井（わすれゐ）の水（みづ）

斎宮甲斐

三渡川（みわたりがわ）今はみそぎ川といふ

長明伊勢記に三わたりといふ所より汐干ぬればあるき渡るよりかなたのきしへ行ゆるなど汐干ぬれば松崎といふ所までまはり志ほ満ぬればあらためをはえまはるで尚遠く見ゆれど市場といふ所まで記し汐干まちさがひ其わたりの三所ハ久しくば三わたりとはいふなり

三わたりの磯まはる人道

文治六年百首
雲津川せきいれてまける苗代に秋の色こそ兼てみえけれ　俊頼

附言 此川勢南勢北の境にして北畠國司ハ勢南を治めしによりて永禄十二年信長伊勢を討んとせる
によりまづ木造を味方にせしかバ國司具教卿大に怒り柘植木造の人質にある娘と其母とを此
川にて串刺にせらる　勢州軍記

小野古江渡

小野の湊とも云 指南車集詳　參詣記云 雲出川の末を渡るとて志のぶの小野の古江ありんと
やう名あるところなりけるを都の人をたよりてゆかまほしうがきえぬるも物うく
さらましと思ひ出でてと云 ○古名ハ此あたり濱辺をのそミ遍りそのこゝろ延喜式斎王三時
の祭ハ六月十二月晦日臨近川為禊 八月晦日臨尾野湊為禊とあるを此川とハまた川ホあるべし

夫木
うしほ汲蜑のいとまも年ふりてやゝ朽にけりおのゝ江のきし　長明

續後撰
伊勢の海小野のふる江に此流きにし江のなかれてもみえん人の心を　不知讀人

小野橋

小野橋ハ古江に架りたるなり云之星を御衣の橋とも云
又一説に小野の古江ハ湊の坤の方にありて俗に古川といふ宮川の川尻と古老の傳ふるもあり

須川

須川 雲出川の更名 俗に南くもずとも云 ○肥留社 ○月本 須川の東にあり 此所大和街道の分れ道なり 阿保越 又伊賀越とも云 伊賀の上野へ出る道なり ○月見山 宮の東の丘の園ハ月本村につゞきて此名ありとぞ

曽原

須賀貫村より一里津より二里余 ○星合村の續村曽原の出里之獲原の御厨ともいふ ○古城跡 村の西方にあり北畠の家臣天花寺城中島日新左衛門尉等居之

三渡濱

曽原村の北の濱今ハ新なる川の堺の海にて昔ハ一時の名をとゞめてひとへ波の引しに三渡と見合て継来せしと
參詣記に云「松風のつよき三渡の浦にもつきぬ寄なる入海に向ひて旅行の人の休ひにと聞へバあはれなるめぐらしとて志本のひろき所まち得ると云ふ」尚圖上にあり

中道(なかみち) 此所より川辺の宮への道あり旧ハ松縄手と云所也 ○三渡の中ノ庄なれば中ノ庄村といふなり ○小津(をづ) 中ノ庄村の出来なり 左の方に牛頭天王(ごづてんわう)の社あり

六軒茶屋(ろくけんちやや) 又三渡り村とも云 伊賀へ此所より出る道あり ○渡川(わたらひかは) 雲出川なり

三渡りの裾に流るゝ渡川袖国山のすゑくだりけり　読人不知

渡川の南より袖国山へかゝる路の右手より西へ入る阿坂(あさか)山のふもとなり

△是より右の方西へ凡十町山道に

▲阿坂山(あさかやま) 一名袖国 ○正法山浄眼寺(しやうほうさんじやうげんじ) 此寺は伊勢国司の開基にて高祖浄永(かうそじやうえい)大居士といふ これは浮屠(ふと)氏が例の妄誕(まうたん)なり

▲阿射賀神社(あさかのじんじや)三座 ○嬉野(うれしの) 阿坂(あさか)の社跡(やしろあと)なり 実は是を小阿坂といふ

百首

うましとこそのせし草の原つむ袖なき藤袴かな　度会元長

▲白米城跡(しろこめのしろあと) 北畠満雅卿(きたばたけみつまさきやう) 応永三年に築く 于時足利義満(あしかゞよしみつ)より是を攻めてのちに水の手を切らるゝ 城中(じやうちう)兵糧尽きて白米をもて馬を洗ひ水をたくはへし如くに見せければ寄手(よせて)遂に囲をとく

▲阿坂行宮旧跡(あさかあんぐうのきうせき) 阿坂の東十町にあり ○東明山景徳寺(とうみやうさんけいとくじ) 小阿坂村にあり 浄土宗 すべて記文略す

忘井(わすれゐ) 御所の右へ入方にあり 標石(へうせき)の銘は関(せき)源内の書にて傍に小社あり

天仁元年斎宮群行(ぐんかう)の時忘井といふ所にて

千載集

わかれゆく都のかたの恋しきにいざむすびみん忘井の水　斎宮甲斐

按ずるに此古跡は一里ばかり西部村といふ所にあり 昔斎宮の路次(ろし)の後世此街道へ移出しけるなるべし

久米(くめ) ○塚本(つかもと) ○松江(まつえ) 村内に八幡宮あり ○舌つゞき村なり

利隴山薬師寺延命院(りろうさんやくしじえんめいゐん) 松江村右にあり 俗に松江(まつえ)の薬師といふ又子安地蔵(こやすぢざう)を安置(あんち)す

此浦より漁舟をうかむれバ津の入海に尽く其舩路を
くれて魚をとらしめ又あまのうづまるどさせく興とを　社記ニ曰祭神ハ天津
稚女稚日女命とやて伊弉諾伊弉冊御子天照太神の御妹にて
おハします欽明天皇の御宇に津国活田長挟国よりうつらすの地
にうつり給ひ矢野の神となり数多年をかさね人々の願を満給ふと云
神代巻に神の脊股に機織せ給ひし時そさのをの尊斑駒を逆剥にして投入給ひしかバおどろきて梭にて体を傷ひしにより神さり給ひし由神云　然るに粉川
氏の加良須考と云書をみるに社記にハ違へり小加良須社を加
良須女の御子天水中主命之とて度會延經の神名帳考證に
稲荼の神社なと云説も破せり其辨説長文にて引證多し
因てこれを略す其書をみて知るべし

▲星合祠　星合村にあり　小祠七座を祭る　此所昔ハ入江なりし所に星合濱といふ今も濱辺へなれど遠し　神名帳
云波多神社也不祭　棚機姫神之所に星合神と云
○按るに神代巻に稚日女命斎服殿に神衣を織といひ又古語拾遺にハ棚機姫神
傷身死とあるよりあり此所にあれバからすの神社に付る義あり尚考ふべし

現存六帖　伊勢の海名に取られて浪枕かたしやまとらん星合の濱　九条内大臣

▲一志浦（いちしのうら）　千載集　いせ嶋やいちしの浦のあまだにもかづかぬ袖のぬるゝ物かは　名所

▲雲出崎（くもづがさき）　いせ嶋や月のこほりはよる〳〵吹を 津がさきの松のむら立　大中臣親守

垂水（うるミ）　津の南にあり　垂水といふの蒲地の古名なりしが爰に住し人を垂水の君といふ其の孫阿理眞公孝元帝の御時にたつて高樋を造て旱魃を救故て垂水姓を賜

附言　又諫争録云　垂水廣信は後醍醐帝に諫表よる確信これを用ひざるにより国を去て垂水に耕をす其後大塔宮及び当氏義貞等より重録をもて招けども遂に出ず書を著し嘉文私記六十五巻と云　但し此書傳へざるは惜　孫松坂の南嬉野村にありと云

垂水山成就寺（たるミさんじやうじゆじ）　長法寺とも云　垂水にあり本尊大日如来　むかしは伽藍也白河法皇伊勢御幸の時三百貫の寺領を寄附し給ふ元亀の兵火にかゝり退轉せり今はわづかの小堂のみ村の内にあり余も堂上にまうでし事あり

藤潟（ふぢかた）　津の南一里　歌には山とも浦ともよみて古の藤潟之　村中大木三抱斗なるありて是は上人のまつの名なりとすひつたれ此地は垂水の南にて昔の宮の御厨にて塩九斗内宮へ献ぜる故に是を焼出の里といふ○むかし藤方の御厨といひありこれは小畠國司の分家藤方刑部が浦入る慶田住める處也

名寄　さゝくさもまだねらじやいそべくる若菜はしもべき藤潟の山　好忠

建久元年良子内親王家歌合　ふぢかたの古紫の色見も識し浪波の深くぞしみけん　讀人しらず

○片樋宮（かたひのミや）　村の内藤方の森にあり但し是は片樋の宮あとにはあらず　社名の片樋宮は石坂にあり誤し祀るといふ所こそまさなれ

上野（うへの）　藤方のつゞき村なり　○高茶屋（たかちやや）　茶屋多し此所より膳夫にいたる　富士山見ゆるといふ　○小森（こもり）　十社の宮ありなほ禰宜

島貫（しまぬき）　雲出川　小村なり　○雲出川（くもづがわ）　島貫村今の雲出と須川と所隔て大川とあり橋あり水出れば船にて渡る是を雲津ともいへり

○按るに阿漕ハ地名ふくえハ一堆の磯にてありしなるべし其説寄二六帖　鯛の題にて

あふことをあこぎの嶋にひく鯛のたびかさならハ人もしりなん

此哥を本としていせの海あこぎが浦にひくあみのたびかさなれば顕はれにけりとさへ讀たり。
あこぎといふ名のみ専ら云濃の字をコキと讀て安濃浦を讀りけり。○又云あこぎハ海子
の事にてきこゆる本なるべし是れハ塩木をとりて身を積するもの多さによりてあこぎとも
いひまたみやこの説者ハ万葉三に「大宮の内まできこゆあびきすとあこととのふるあま
のよび聲云○塩木ハ此浦に古哥多し　「新後拾　崇全法師　「身をつくるよと底をかや
きて塩木つむあこぎが浦になれし月影　「月桜察僧公敏　いつみせんあこぎがうらの
継ぬらてくさむや塩木のつくきおりひを
○又あこぎ拙語と云ふはあこぎ平治といふ人の名なり何れの説ハ昔平家の本國なる安濃郡
なりしが平氏を平治と讀りしなりと云ふ其ハ物語に曰平氏の族香右馬允貞光が孫右京進
盛光が子次盛といふ者伊勢掾にありてや、住居なりしが此浦に人を出して網ひかせ
より御贄の料も妨なる故に禰宜宮司公に訴へけり次盛是を受て一族の平氏百二十騎集め
そろへてよく贄の蜑を妨ぐる十禰宜も仕方なくて國司に申されば守きて付軍をそろへて
次盛を誅む次盛お負てうちとられけり張本なれバとて法に行ひけるとぞ其後次盛が墓に
名やさまびけりしを三安次盛といへる平氏なるべし此説てより異靜定なるとぞ
○此書奥書　明徳二年十一月　二日云　云　按るに此説擬あるに似たれども彼次盛か刑に行ハれしところ
いづ身年号なし又右京進盛光ハ伊勢家の祖棟の右馬允盛信が弟也次盛といふもの
系圖にいへど安元治承の比ろとみれバ六帖によくくし底の弟子りハのおあとハ二百余年も後のものなり

岩田山圓明寺

岩田橋の南にあり　本尊大日如来　往昔伽藍ハ後宇多院の御時西大寺興正菩薩
いふ人營るが度會郡楠部村に律院を建立せしなるべ
此岩田村を寺領に寄らるよりて岩田村に一院を立て密明寺といふ元亀元年の兵火に
堂よし跡まる寺院も天正の乱に亡滅し今ハ本尊大日如来のまいさゝろの小堂と斎宮
の人此寺にて喫茶をなれバ心身清浄なりて
祢宜等かしなずといへる俗說なり

閻魔堂 岩田町にあり城主より寺領も寄附ある 開基詳ならず○藤枝町のさかひにあり
此東弁天の社あり町名にもよべり
八幡宮 岩田橋より二十町南又野の社とも云○昔平氏の清盛忠盛などの勧請せし社也
此辺八町程の間の地名を八幡といへり○津の町よりておさき宮なりしを
寛永九壬申年城主の祖此ところへ引てありしより造営 八幡社の後に小祠あり これは
しりひさりしとぞ毎年八月十五日祭礼み獅子発行拍子出を
結城入道宗廣の古墳也 古年紀に此に戦死のよしみえたり

▲神宮寺 津の町より西 雲出村にあり 本堂十八間四面本尊十一面観音右は虚空蔵童子左は
は春日大明神也 古神宮諸荘の後何のころよりか観音を安置せしが時代不詳両宮造立するは
古神宮の神鏡ともいふ古名なり此寺の名井は古神宮古屋の名なりを称
建る所なりし又神田あり牛馬不浄を入れずして耕作し長官へ刈まいらせし正月元旦御供に備ると云
此神田へ収る穀を依て長寿中に城主より加増し納められしより納所の名も是よりあつ
まや○此神に祈れば疱瘡の難をのがるる験ありといひ伝ふ

▲渋見 津より廿町ばかり 雲出村の西 乙部兵庫頭藤政が城趾也乙部は源三位頼政の末代と長野家の与力にして織田上総介信包がために家をうしなひて生害せらるこれを系城といふ此地系の名多し

青柳のちぶくれ山のうしろ田にのりそりかけてくろうの鳴　西行

▲志布弥神社 神名帳にのる 祭開化天皇御子志夫美宿祢命也

▲矢野 津より一里余 藤枝が庄の内へ入るなり 溝子にあり

▲小加良須御前社 地名はその名は今須賀村より東の奥にあり当社は矢野村の内にて社地は海岸之岸の松林は至て勝景にして松枝を洗ふ浪の音にても勝まさり

西行法師垂水成就寺へ参りし道にて小童榎の木によぢのぼりゐたるを見て

さる児と
みるより
早く木に
のぼる

といひければ小童
犬のやう
なる
法師
来れば

と付けゝり西行
不思議の思ひをなしぬ

禅の津の町と海との間にありしと也　潮ハむかし松原の邊へも大船入しと云ふ

夫木　いせの海あまて松原すなりそもなひし日数よるとハえつて　為家

安濃湊田　名寄　お渡をあのゝ湊田かのしとかるもかもねもつんへぬなりけり　長明

安濃河原　仝　神風やいせ路と行ハ冬さむしあのゝ河原に衛鳴なり　尊俊

又あのゝ板橋の名ハあまたども説ありあれど略之ともに旧地未詳

岩田橋　東西よ架　長サ三十間　津の町にあり潮満ときハ此橋の下まで舟入る此西北の橋爪の西側に當城の岩田口と云見附あり

名寄　あさぼらけ岩田の松も霞みあてみわたせバ浪こしやあのゝ板橋　隆忠法師

是は本歌の歌なとと云　いろいろなるや　○岩田ハ岩田の誤りなりとぞ

岩田村　古へは津の南東の村也　舊ハ弥椽にて古神宮の弥楼織る處を調出を存に写く北畠材親卿の記にみえたり　按るに弥撚ハ蘭楼なるべし

阿古木浦　今ハ津の城下岩田橋より巽に有ると云へど古所詳ならず　○阿古木塚　往来の阿濃町より東の方海濱に古墳あり桜木を植よりて

阿濃明神と云　○參詣記云　安の津を出てあこぎが浦をさる行ほどに塩屋の畑まで海辺をとふらいの宗家緒に行かりひをえへと云　昔の有りさまみえよりてあるべし

雲出川

雲づ川
あぶなき
うきの
細橋は
竿よ
なり毎
も
わたれ
旅人

栄雅

三度大麦をあぐ　これハ海中より觀音出現の時漁猟し給ふに似たり　後これを魁に携しむ　又借る物ハ鶴の子、斧、これハ赤そて　又牛王頂戴の儀式ありて神名帳を讀む　是も古へ神宮穴向の地に是ハ諸神に昔年の祭礼　拝並朝拝三番あり　これも古へ神宮伊勢三座の内勝田太郎まで来りて法とむ是を伊勢の神楽ともいふ　十余尚図の上に記る

國府の阿弥陀　觀音の像となり　當國絵麻郡國府村上寺山の安置ありしを　記云　寺荒廃して尊像雨露に様んするを抑しミて延宝の比當寺の　旧記なし　境内に捨行しこえ　縁起あり　諸人ども國府村ハ古へ遠つ國府といふ是國司在國の命ありて國のまつりごとを執行ひし所なり

太楽山上宮皇寺　町にあり　聖徳太子御宮にして太子像に紫雲寺是之　津の寺

元ハ律宗にて今ハ高田流之開基未詳　和銅年中草創にして本尊ハ太子　什物太子の南無仏の像、俗形三の像とて其法を示す。○勝曼経講説の像、太子画像六幅金岡の筆今に傳来せり○當寺中興信西法師彼宗門を帰依し親鸞の像を造立せり中興信西

十六才の御像　崇佛する場をかまへる田三代顯智上人まで久しく此不知夢り葉十二代お績を慶長元年に堂宇焼亡して宝物のこと

○阿古木社　寺内にあり　毎年七月十八日寺僧法会あり　阿古木といふ者ハ當寺の檀越たりしに依て是を執行ふと云

松原　此邊の海上之今ハなし　明應七年の地震に城下松原ともに波に沈めり其ハ

香良洲御前社

多気窓蛍云
昔西行かくすと
来りて扇紙
ひろひけるを
鉄くまるよ
かゝる雁の
文字より
いまひ そめぬまし ば
とはずとがり處に數ありて
かゝれぬの よも
あふぎ
えしるゝ

古殿
本社

或云むかしハ
此ふ鳥を出る
扇紙にうりたり
按ずるに稚日女を
祭られ烏の縁
なきにしもあらず
祭礼六月十六日
之又此神前にて白
衣を紙に包みて
出しぬれバ藥芳
を賜ひけりとて紅
に準へて挿頭とする
いはる俗なりけれ
女神なれバなる
べし

久母宇神社

義ハ直會御贄の鮑玉貫の鮑割菜蝶の類を調進する料理所のあとなり

津　七十二所と云ハ工商都をあつむべき繁花富饒の地也○古へを津と云ハ古私記海濱の湊にてありし所なり西名安濃の津といふとも何となく津とのミいひならはしたるなるべし

昔伊勢津彦の供奉の神に鏡雄彦と云る神ありこの神こゝを領せしより年を経て桓武天皇十代の後胤出羽守平正衡の三男安濃津三郎平貞衡より平氏数代の住居也　此後明應三年五月七日同七年六月十一日両度の大地震に安濃津十八九丁流没せるにより何となく今の地へ移る其後文禄の頃今の安濃津へ細野九郎左衛門尉藤敦城を築きて住めり天正十一年より織田上総介信包城主となり坂石垣を構へより又天正十八年富田家城主と成慶長のある城下廣大になれり

附言　参議亞將源親房卿洞津考と云るものゝこの津の物語にしてこゝを洞津といふよしへいひしとの文なり其概略を記せられ

此津の名ありしより洞と云ふは格式の文にもあり代々の和歌にも多かる中に伊勢守繼蔭が記には洞津と云て其書やまつりけんむかし國の人のつくれる時に伊勢に洞津ありきやと見えしとぞあのゝ中しろのおもかげに安塚とて住ける是ぞ國の圓帳して民のつかさにまつりせしにも衛尓の塚とのゝゆきのせなか今の都なる其ハさ斗もなし平家のむかし此國にひそまりける時より八腰の宮とてありしかども絶て今あのゝ侍尓とかく田になしてけるか中にあり角ある木ある所にて在なりし又左衛門の塚とて礎の傳るりのハ中しろ乃跡なりかあのゝ侍尓ハ増世の東かしにある楠の杜とぞ中傳へき其ハ左りにおさむちのやしろ古き深の氏社ふさふなりしびしも今ハ松の灌風の音さへ絶ねこの二社をあのゝ権宮之跡とかしおもふそうするぬあるかし　下略

○愚按洞津の訓ハアナ津なるべし　洞を窟とよむ例あり

坂士佛參詣記云　伊勢國安濃津と申す所を過て待りしかども　中略　此津ハ江めぐりて浦遠からず　往来の船人の月に漕歌　旅泊の暁の枕うきこえてあハれき浪の音志のびかなく侍りしかバ云云

風さむさいそやの松蒼さえてよそたつ浪にぬるゝ袖かな

愛宕山（横の小西のまへなり）これを愛宕権現と云當嶽の子の上方猿主として塔世乃惣社之延喜式神名帳に比佐豆知神社とあるは是也（白子にも同名の神ありいづれか是なる）

恵日山観音寺　本尊如意輪観音石像（秘佛也）とかふ縁起曰元明天皇和銅二年乙酉二月二日安濃津の浦より漁夫の網にかゝりて出現す故ひ奇瑞叡聞に達し勅によりて伽藍造立ありしに慶長元年廿無火に焼亡し其後造立して真言の僧房奄藝郡窪田村の内蓬莱山六大院をもつて後とす（今は大宝院といふ本坊也）都合今七院なり（舊の伽藍の跡はあの松原のあたりにありしといふ又おくるを一の御厨とも云即阿漕が浦の御贄のあたりにありし奉るれば其名のこりたるや○法厨の事は勝に委云べし）古神宮影向の霊場一郷鎮主の地なれば古来門前にある井を影の井といふ（香店の事も既にいふがまい如く古は寺社人家も多かり）○毎年祭礼ある是を鬼押への神事といふ其式

二月朔日未明修正會の法事勤る節に當番の氏子まず竹を持てエイくと云て駈入れば諸人も共に群集し同音にエヱエイエヱと

阿漕浦（あこぎがうら）

いかにせん
あこぎが
うらの
うらみても
度（たび）
かさなれば
かはる
ちぎりを

後照念院
関白太政大臣

圖ハ阿漕の草紙の
意を寫し尚本文ハ
あこぎの条下よ
出せり

阿弥陀府図
恵日山観音寺
鬼おさへの祭
ゑんま堂
行者
山神
ぎおん
千手堂
あへぜん
天神
ゑびす
八まん
ふどう
あへぜん
修まひらひて為輿
狩衣にて梅をちらし
又身弱らひて鬼の
形に立て鼓を拂ふ
者ありこれを
追ふ者数十人
白刄をもつて
此鬼を切んとす
かくあること堂
を三匝して止
其足の佛場へ
尽の道揃なり
とらひ佛ふ

神事ハ二月朔日の夜
にて後堂内に螺
太鼓乱調に打ば
鎧て其日の若髪を乱し
棒松明さゝへて数十人
本覚院の前なるが
先駆として毘沙門一
人大般若経をさゝげ
立出る鬼も具足して
斧を持冷を人を
鉄棍を提げ本堂へ
走入るこれに付添者
ごま堂
弁天

塔世山（さふせさん）
四天王寺（してんわうじ）

八王子

やくし堂

天神

太子堂

弁天

北畠源國永卿家集詠薬師
名号和哥十二首　阿弥桂祐
八重桜もあやなく霞吹ば
晴行空をながき夜の月
餘畧
秋葉
本堂
神宮
往昔太神宮御倉所境内櫻多し
さうせの川
さうせの橋

一社ハ春日八幡の社なりといふ　彌尼布里神社ハ式内之称なり大宮大明神といふ稲荷ふしのもとにて伊雑宮の穂落社と同神にて祭ハ保食神なり
大宮の社なり　宮寺を宝幢院と云津の領主の御祈願所毎年正月十五日御祈禱あり○木鎌村○稗田村○杖永村○越智村○横地村○衣手山

右道の村々先よりして西行の詠あり
木鎌にて稗田をくれば杖永や稲塩とほくおちこちみえ里

衣手ハ　酒井川といふ小川の上にあり

夫木
衣手の山乃麓に立庵のうら淋しきま曙乃夢　　兼仲

○酒井神社　酒井川の傍にあり　祭神秦酒公之此石郡山村といふ

▲根上村　町家村ともいふ昔ハ此所往還の路傍に老松の大木あり根六尺もあがりて様の如くを旅人往来の里の名とする也今ハなし是より一里余りに白塚村西海辺漁人多し

根上りの松に笠うけ詠むれば志ら波よせくるあまつの里　　[illegible]人

▲江戸ノ橋　太郎回小の入口左りの方の土橋なり　東国往来の道なりにして傍に古跡焼標石あり

▲算所　中茶屋の西裏町也　今ハ修験者陰陽師の居所也　其昔ハ加茂修理少進景道が九年の役軍義に属して安部貞任を討　其男加茂五郎景清　其男加茂伊勢守光貞　其男兵衛尉光兼居住し代々光兼義久年中に討死して其家断絶す　其跡に景清山の神といふありて杖れむの木の大樹畠の中にあり　又東の方より門前といふ地名あるのみなり

塔世山四天王寺 又後園殿と云 塔世川の北にあり 曹洞派にして本尊大日如来左右阿弥陀釈迦及四天王鎮護○本堂○鎮守三社其外仏像後園○中尊薬師如来 薬師如来の七不思議ありて出現の池といふ又行眼の蛙みちといへり其余略してしるべし 續日本紀天平九年聖武天皇諸国に四天王寺建立の勅を下し給ふ就中此寺も帝都にさきだちて諸国に先達て建しむ此ゆゑ早く停止となりて他に衰へて已其後加茂景道是を中興す 久安三年丁卯三月とあり 又四條院天福三年叡山快然東遊して黄金の誕生仏を得て帰り当寺医王殿に安置を時に寺を傳へざるによりて快然一菴を結びてこれに居住せしが又錫を飛して小城に遷り永平寺道元禅師の継となる其より此寺禅宗となれり 其後文禄三年甲午正月七日織田信長公の母公此寺にて逝去是は信長生害の後上野介信包天正十一年より津の城主たるによりて母堂もこゝにありて当寺に葬る墓印あり其後冨田信濃守知信寺領又十石を附す其後慶長五年石田三成逆乱のとき兵火にかゝれり今の其後の建立なり○聖徳太子将軍木の四天王の像あり浪花天王寺の縁起に見えしに当寺亦其縁起ありといへども伽藍建立のことは国史聖武記に見えたり○境内に芭蕉の塚あり○塔世は往古の地名なり

塔世橋 塔世川 塔世村

橋は南へまはりて川岸の東南に村あり○神風橋は又は安濃郡古保の御厨ともあり御厨とは神宮の神事の御饌

○若松浦 海濱繁昌の湊なり天平十二年十月聖武天皇伊勢國行幸の時

一万葉六 一里程之　いもに恋ひわかの松原見渡せバ汐干のかたに鶴啼わたる　御製

新古今　いせしまや汐干のかたのあさなぎに霞にまがふわかの松原　後鳥羽院

○三日市 野町の西にあり ○如来寺 延暦帝勅願所にして三尊佛の古像あり

御堂の裏に親鸞上人関東 毎年七月十日に釜井祭といふ佛事あり顕智上人の由緒といふ

修理の時自筆の銘文あり

▲玉垣 白子の東の里 古名瑞垣の里といふ○弥都加伎神社式内にて本社土道神

或は俗云の御前と称す今は内宮へ糯米を献ずる例あり　玉垣ハ土垣の文字のよしを誤りて然るべしなるべし

▲白子 本名寺家村白子ハ俗称之 磯山のつゞきまで里にあり　南ハ奄藝郡より北ハかはさ安川を限り河

曲郡之人家一千軒餘繁昌の湊也　江戸へ船積をする問屋多し素麪 紺屋形名産之

此郷の婦女俗に妊娠の帯びをせざれども難産なし

○白子濱　白子町の東也

月影もうつる浜の真砂貝ハ波もひとつにまじりてまがふ哉

附言
昔平家繁昌の時伊勢國の者ども黨をなして上総介忠清是を支配し　古
市の白子黨といへり　治承四年五月高倉宮御むほん宇治合戦のとき渡辺黨
と宇治橋にてたゝかひ白子黨悉く討死なりしが川にながれて死ぬものおほかりしとかや伊豆守仲綱これを

津
江戸橋
京乃

白子観音寺（しろこくわんおんじ）
不断桜（ふだんざくら）

冬（ふゆ）さくも
神（かみ）代（よ）も

観音堂

方丈

宗祇
本立明神
神明
熊野権現
天神
白山権現
弁天

渡海御免にて桑名と同じといふ、

○諏訪神社　祭る所建御名方命八坂刀賣命之　四日市町 赤堀家の後なり　其地を江苑田と云此社は赤堀家の重宝田原藤太秀郷の胄あり

○三重川　四日市の町内石橋あり千草より流れ出る川なり 俗に三重川ともいふ 千草ハ千種家居城の地にて三里ばかり川上なり

万葉九
吾妹三重の川原のいそのうらにかくしもかもと鳴く蛙かも　伊保麿

▲濱田　旧ハ濱村といふ　四日市より一里南なり

新古今
打絶ぬへきを頼むかり風の寄んあさける迄ハ日永なりけり　長明

▲日永　泊村のつゞき追分より半里　往還四日市までの間なり　名産團扇　○田畠川○長田川○いさけ川○落合川○鉄亀川○加太夫川　皆橋あり日永町の中なり長田川ハ長田御厨村といへるあり此より此川上壘跡ありて平家の族伊勢後楯の三郎若菜五郎なる元久元年鎌倉に叛き籠りしと伊賀守朝雅これを討し所なり

▲四足八鳥山観音寺　濱宮内院とも云泊り村東にあり俗に四日市へ出る所なり　後花園院勅額開山良忠上人　傳云神武天皇東征の時軍利あらず太神宮祈給ひて八咫鴉を使はされ導かしめて敵を亡し給ふ其八咫烏をまつる所なり濱宮とも又陸路見とりふもとの出入なりに足八鳥のよりあつまりて勢ひなり又此寺をの御太和森といふ

昨日こそちかふに立見えしが今日永なる洲崎に見るありの一村　西行

▲追分　此より右ハ京海道左りへ分より左ハ伊勢道なり　大鳥居あり　◯是より伊勢の津までの町並なれバ

▲高岡川　俗橋あり泉川関川の流にして大川也此上流を甲斐川といふ

名寄　いせ人はひがごとしけりさしまより甲斐川行は和泉野のなり

◯天沢山龍光寺　神戸の町にあり　後花園院勅願所　北畠大納言満雅公建立云々

▲神戸　白子より一里半　昔ハ国中神戸六ヶ所なりしが此所其一なり　神戸御厨の地名なり大社ある道より所ありし昔神戸氏ここに潤庸の祖とする　神戸ハ人具盛の時市中となる

▲飯野社　是を高殺の宮と云　神戸の町にあり　祭神飯豊姫命

◯金井林光寺　神戸の町の後之　俗に林寺といふ　聖武天皇勅願所　本尊千手千眼観世音

福寿院　京小嶋地蔵坊　真言宗之

▲矢橋　神戸の南又町　石標あり　右稲生　左白子　◯鎌倉権五郎景政塚　田中の森にあり

◯長太　此浦ハ津湊の渡より古渡也　昔ハ尾張津嶋への渡海ありしが甚繁栄所なるよし今はさびしきや

万葉集第一　三野連入唐の時　春日蔵首老
ありねよし対馬の渡り海中にぬさとりむけてはやかへりこね

夫木
舟人のつなまのけさの波はやみをぞゆくふやてこの世なりけん　中務卿ここ

洛祇園牛頭天皇まうしまをと

附言 伊勢物語 京にありわびて東の方に行けるに伊勢や尾張の海面を行に浪のいと白く立を見て

いとゞしく過行方の恋しきにうらやましくも帰る浪かな　業平

▲桑名御船場　海上より船の目当高燈籠常夜燈番所の脇にあり

▲天武天皇頓宮　桑名の町より北町外西南矢田村にあり信八幡の社といふ○四羅山紀行に曰昔清見原天皇大友皇子に難を吉野より潜幸ありて此所行宮とし繕ひ給ひし皇居ハ此地よりは不破関へ潜幸ありて後に戦ひ勝給ひて即位せ給ふ天武帝是也皇后ハ天智天皇の御女後持統天皇也

▲矢田河原　縄生より　今ハ矢田町といふ　天正十二年十月豊臣秀吉織田信雄と和睦ありし所なり

▲城山　矢田一郎左衛門尉篭之永禄十一年織田右府信長公これを誅代々を○三ッ狐　此あたり年久しく住んで怪をなすとぞ人口にあり

▲町屋川　橋の長サ百六十間此所より西ハ西面よを江の山　もとある此西辺伊勢の境なり

▲縄生　より里　小向のできれる　昔も金総の駅といへり○金井　蒲村といふ　即金総之○伊勢遥拝所をむかし神戸の跡なりといふ

▲小向　松寺のできる○井尻の神社　今神明といふ　小向の後にあり　祭神素戔嗚尊式内之左女
古城の跡あり是を柿の城といふ　沼木三河入道宗喜楯籠しを弘治三年河尻佐ホより小倉三河守大将としてこれを攻る

名所 ○星川　朝倉なるごく細き流れをいふ○安渡寺　本尊観音

天津星川瀬に影のうつろふ夜ハ安のかハりと見ゆるよしの歌
安野川やとの渡ともに天の川の名なりされば安濃寺も此号の言より名けしなるべし

◆星川　松寺のつゞき　◯星川神社　所祭織姫の神式内なり

名寄
ひきうたハ橋とハなりぬ鵲のさそれなあし星川の水　長明

◆朝明山　桑名と四日市の間左にあり　◯朝明川　海道にあり

名寄
その福ねる朝倉の山乃春風霞をわけて花ぞ散る　定家

◆西富田三光寺　蒔田相模守墓あり　文治三年一院御領にて蒔田も甚房の守護人なりといふ　◯立坂神社　式内祭神若宇賀賣命なり此社の境内より流るゝ川を米菖川と云

◆富田　四日市の北十丁　名産焼蛤　◯鳥出神社　富田村の内右の方の森にあり　式内也不知祭鳥鳴海神社と云但社傳ハ遠あり

◆四日市　濱田のつゞき　日永村に一里　宿駅なり人家五六百軒海陸便よく繁昌の地也
毎月六ケ日市あり四日より始る故に號く此湊二町程遠浅なり

日永追分
長明渡海記
紗侘ぬいさ濱むらに
立よらん
鶴明
日永

代神楽ハ桑名の
近村太夫村より出る
是を代かぐらと云ハ
庚申の代待又ハ代垢
離などの同物なるべし
放下をかぬる其品
をまねぶ

四日市 諏訪大明神社

本社

八まん
天神
いなり

毎年七月十七日祭礼（俗にひやうりまつりといふひやうりハ神楽のひやうしをいふなり）又八月十八日祭禮ありて第十七日を神楽といふ公より社領御寄附領主も尊敬して當所第一の神社なり（中臣の神社也又春日大明神と称するなるべし）○袖野山浄土寺（業名の市の中にあり）浄土宗本尊阿弥陀如来○江塲有王丸塚（由来詳ならず）○佐野神社（魚屋川又あり）祭神稚武彦命○尾野山尾野神社 素盞烏尊 和名神云 云

附言むかし此所に尾張山正安房といふ悪僧此神社の別當なりしが此地に城を築き郷を押領を織田右府信長公永禄十一年攻めて誅せらる

◭瀧室山妙見寺（業名の駅廿丁計东東方村にあり）前の城主業名少将祈願所にて山伏寺なり○式部清水（此山の西の麓にありむかし和泉式部ここに来りて住めるよし又名づくといふ丈人詩人来りて翫ぶ）○左ま村（業名のを村なりむかしここより代神楽獅子舞六組又三重郡阿倉川村より六組ふ上十二組出る法國寵護をとるを旅り左ま村といふ）

◭七里渡 旧名は間遠の渡といふ天武天皇尾州熱田迂幸の時此渡海長きふよりて間遠と仰ありて若潟を結兼給ひしより

古哥
みなとの月よみるをのとかにして里に急がぬ夜半の舟人　不知讀人

此渡里は伊勢尾張の境木曽川の落合此に入る風あしき時は尾州佐谷へわたるべし渡程三里渡しみな又佐谷よりの陸地は神戸鳥森を経て熱田へ出る又佐谷から上米里に海ア郷津

冨田焼蛤
蛤のやかれて啼や郭公
其角

名物志ぐれ蛤

同 天武天皇社（てんむてんわうのやしろ）

三條明神

羅山文集
曾聞二帝此停車
憾在吾邦未見書
今問先蹤人不識
誰賡風土補方輿

桑名渡口（くはなのわたし）

△木造。禅田。秋長
誠智。横地
△江戸橋。算所
津　安濃津
大樂山上宮寺　河芸　本社
岩田山圓明寺
△渋見　乙部跡城址　玄庫
△星合社
上野　茶屋
小森　嶋貫
曽原　古城跡
△阿坂神社　阿坂社址　まで野
忘井
松坂驛

△衣手山
寶泉山天王寺　大日堂　薬師堂
愛宕權現
安濃松原　安濃澤田　安濃河原
閻魔堂
△志布見神社
△一志浦△雲津渡
雲津川
中道。小津
△向米城跡
久米。塚本。舩江
愛宕山龍泉寺

△酒井神社　三社
恵日山観音寺　茶屋地之北にあり
岩田村　岩田橋
八幡宮　結城入道古塚
△矢野
垂水　成就寺　垂水君
小野古江渡
六軒茶屋。渡川
△藤方片樋宮舊跡
利瀧山藥師寺
光明山遍照寺

△根上り松
寶世橋　寶世川　寶世村
國府阿弥陀
阿漕浦　阿こぎ塚
△神宮寺
△小加良須御社
藤潟　片樋宮
須川。肥留道
月本　月見山
△阿坂　正法山浄眼寺
△東明山景徳寺
四五百森
少名彦名祠

梅松山菅相寺 △光福山朝田寺 △長田祠 △川嶌 △清水 清水道

△七見 旧神社 △意悉神社 △下樋小川 下樋小川橋 △大國玉神社

櫛田川 △神服部機殿 △魚見社 櫛田 五智如来 櫛田社 大櫛神社 櫛田祠

△保津 天香山神社 △神麻續機殿 △再拝橋 齋宮村

齋宮舊蹟 旧濫觴○旧卜定○旧群行 旧忌詞○旧除氣 多氣川 一名稲木川 又祓川 同繪馬○大佛 花園 御溝池

△北畠屋敷跡 △勝田 △和屋 翁塚 △藤原 △御笈山 △濱村

△根倉 旧神社 佐々夫江 △大淀 大淀松 大よど祓神社 馬除池 △村松岸 △宇田 太刀自神社

△有尓 有尓神社 並有尓鳥墓 △湯田野 旧神社 夕引石 △上野 △明星 安養寺

明野原 惣合橋 小窪橋 小俣 旧神社 無量寺

杦田橋 離宮院 沖宮神社 △未曽瀬

伊勢参宮名所圖會巻之三

目録

伊勢参宮名所圖會
三